

2022 年度事業計画

I. 2021 年度を振り返る

日本フィルは 2019 年の「第 6 回ヨーロッパ公演」の成功を契機に飛躍の 3 年間を想定していたが、そのうち 2 年は多くの演奏会が中止の憂き目にあってきた。その中で 2021 年度は、コロナ禍によって受けた“3 つの毀損”（芸術面の毀損、コミュニケーションの毀損、財政面の毀損）からの回復を目指した。

芸術面では、業界内でも随一と評価される徹底した感染症対策のもと、出来る限り公演を実施し、文化の灯を保ち続け芸術性の追究と自らの演奏力向上に努めた。また、一部外国人の来日も厳しい隔離条件のもと実現し、相応の成果を挙げた。芸術面での毀損は大きく回復しつつあると言える。2021 年秋には首席指揮者ピエタリ・インキネンの任期延長と、カーチュン・ウォンの首席客演指揮者就任、広上淳一のフレンド・オブ・JPO 兼芸術顧問就任という新たな展開も発表した。

コミュニケーション面では、お客様との交流の場の喪失、スポンサー企業等とのコンタクト機会の減少は非常に痛手であり、回復は遅々とした歩みとなっている。特に、高齢化が進んでいる定期会員の大幅な減少は、横浜定期演奏会の会場（横浜みなとみらいホール）の改修休館の影響も相まって深刻であり、一刻も早い回復が喫緊の課題である。

財政面を見ると、前年比からは半減しているものの約 2 億円近い構造的赤字（総事業費－演奏収入）が生じており、コロナ禍による財政面の毀損は引き続き大きい。しかし、コロナ対策関係助成金・寄付金、並びに東京 2020 オリンピック関係の助成金等でこの赤字が埋められ、最終赤字額は少額となる見通しが出てきた。併せて、ある篤志家からの基本財産（指定正味資産）への大口寄付により、長期持続安定経営への道が拓けたことを特記したい。

II. 2022 年度の経営方針

◆ 「新しい世界」での芸術性の追求、社会性の拡充

2022 年度は、ウィズコロナ、アフターコロナの「新しい世界」を展望した楽団の意義、活動が問われる時代に突入すると思われる。

コロナ禍での活動を通し、生の音楽の感動と素晴らしさと、文化芸術が人の心を揺り動かす力を改めて強く実感した。日本フィルはこの“活動の原点”をしっかりと捉え、「生演奏の実感、人と人とのコミュニケーションを生じ、心の交流の場を提供する」という音楽の持つ役割を再認識し活動していく。同時に、

近年ますます強くなっている、オーケストラに対する社会の要請に応えることこそ、芸術性と社会性を兼ね備えたトップ楽団として果たすべき重要な使命と考える。

経営目標として、「あくなき演奏力の向上」「財政基盤の強化」を引き続き堅持し、「活動の三本柱+1」を核とした芸術性の追求、社会性の拡充に努めていく。

芸術面では、カーチュン・ウォン、広上淳一を加えた新指揮者陣体制のもと、ピエタリ・インキネン（首席指揮者）山田和樹（正指揮者）、そして長年にわたり日本フィルの支柱となる小林研一郎（桂冠名誉指揮者）、アレクサンドル・ラザレフ（桂冠指揮者）との強い絆を堅持し、「伝統と革新」をテーマに、クラシック音楽の持つ、奥の深い知れば知るほど探求心がわいてくる面白さを存分に味わっていただく。また、コロナ禍での経験から、演奏会場だけでない音楽の楽しみ方の提供を強化する。コロナ禍において構築された映像配信の枠組みや、2020年度設立したオリジナルレーベルによる音源の配信の枠組を大いに活用し、クラシック音楽が誇る作品の背景にある文化的な広がりや深さをどう楽しんでもいただくかを追求していく。

社会性の拡充には一層拍車をかける年となる。「新しい世界」の到来に際し、日本フィルの活動を改めて検証し、社会に向けた発信を行う。当然、SDGsに対応する活動に繋げていく。

◆経営の基本方針

財政的には、構造的赤字が縮小されるとはいえ、通常期へ戻るにはもう一年必要となろう。コロナ禍の毀損は残るが、コロナ対策費強化策のほか、基本財産をもう一段増強し、不測の事態が発生した際にも、公益事業の持続的継続、経営の長期安定化を目指し努力する年となる。

経営面での長年の課題である楽員の処遇の見直しについて、厳しい財政の現実の壁があるが、少しでも前進させることを目指す。事務所は多様な専門性が問われる時代を迎えている。音楽芸術の専門性に加え、マネジメント、マーケティング、DX等の専門性をどう担保するかは課題に対応していく。

II-1. 財政基盤の強化

(1) 2021年度の財政報告（現時点の見通し）

今年度もコロナ感染の未だ収束しない中、演奏会や音楽活動の回復の足取りは鈍く、財政の維持には引き続き厳しい1年だった。現時点の見通しでは、財政の基盤となる演奏収入は（主催+受託）、今年度予算をやや下回る程度と見ている。秋口になって客足が回復しつつあったところに新たなオミクロン株の感染急拡大で水を差されたのが痛かった。その結果、コロナ対策助成等を加える

前の損益段階では公演中止等で苦しかった前年に比べれば好転するものの、依然大幅な赤字の見込みである。然しながら、今年度も上述のコロナ対策助成や個人・法人の寄附等がかなり寄与するので、最終的な当期損失は数千万円程度まで縮小すると見ている。

キャッシュ・フローについては、2020年度に公益法人初の資本性劣後ローン2億円を導入し十分確保されていたので、財務運営は不安なく進んだ。またコロナ対策緊急融資で膨れた借入金も一部の返済を早めた結果、数千万円を超える純減を果たした。

2020年度に、日本フィルは初めて基本財産に35百万円を組み入れた。2021年度も、大口寄附金等を原資にして新たに2億円を超える金額を積み増すことにした。

(2) 2022年度の財政の見通し

2022年度の財政方針であるが、未だコロナの収束が見通せない中、恐らく演奏会や音楽活動の正常化への道のりは鈍いと考えており、楽観的に見ても演奏収入（主催＋受託）は通常年度の70～80%程度の回復が精一杯である。一方で、寄附・助成金は2021年度実績を多少上回るものと思われるが、現時点ではコロナ支援策に関する助成・寄付等は多くを見込めないため、最終損益は2021年度実績を下回るものとみている。

2022年度は、当初予定していた長期資金の新規借入れを取り止め、年度末の借入残高を2021年度に続いて純減とする計画である。

キャッシュ・フローは、原則、現状水準を維持することで、年間を通じて資金繰りの確保に万全を期す方針に変わりはない。

財政健全化の基盤となる基本財産については、現在、役員全員で取り組んでいる寄附金増強運動の成果に沿って、今後も基本財産の積み増しには積極的に取り組む方針である。

II-2. 事業の基本方針

(1) 芸術性の追求

主催・受託それぞれの公演数は、まだコロナ前の2018年度のペースには戻らないものの、2021年度を上回るペースを予定している。まずはこれらの公演を、感染症対策に十分配慮しながら全てを無事完遂させることが大きな目標である。特に東京定期演奏会には合唱を含む大規模作品に加えて、海外からの招聘アーティストの参加も予定されている。実際には入国制限等様々なハードルが待ち構えているが、出来る限りの努力は続け理想通りの公演を実現していきたい。

日本フィルの個性「温かさ」と充実した演奏を通して、より多くの方へクラ

シック音楽の持つ面白さを広く伝えるべく、様々な工夫や仕掛けを充実させる。

(2) 社会性の拡充

「オーケストラ・コンサート」のほか継続的に「次世代を担う子供たちを育てるエデュケーション・プログラム」「地域発展に貢献するリージョナル・アクティビティ」そして近年は、東日本大震災被災地に音楽を届ける「被災地に音楽を」と、活動の三本柱プラスワンを実施してきた日本フィルにとって、社会性の復活は悲願とも言える。まだまだ様々な障害が予想される状況下であっても、こういったミッションを見失うことなく、危機の回避と打開を続けてゆく 2022 年度としたい。

日本フィル独自の被災地支援活動「被災地に音楽を」については、コミュニティの要請を受け積極的に展開しており、その一部は文化庁の委託事業として発展している。今後も「東北の夢プロジェクト」としてより広く展開してゆく

さらに 2018 年度より取り組み始めた「落合陽一×日本フィルプロジェクト」に代表されるテクノロジーの活用や社会の新たな要請に応じる取り組みも活発に行い、音楽文化の普及と音楽を通じた社会への貢献に努め、音楽文化によって社会を豊かにすることに寄与する。

あらゆる制約の中ではあるが、改めて今の日本フィルが出来ることを模索し、その中で可能な限り芸術性の追求と社会との繋がりを求めてゆく。既に日本フィルはオンライン配信も他の団体に抜きんで積極的に進んでおり、2022 年度も生の演奏会とインターネットのベストミックスな在り方を元に、あらゆる幅広い聴衆層とのコンタクトを保ってゆきたい。1956 年から続く 65 年という伝統を常に心に留めつつ、創立以来の新しい世界を開拓していく精神も大切にしながら「伝統と革新」をもって、日本フィルの完全な復活を目指す。芸術性と社会性を兼ね備えた音楽団体として、ウィズコロナ、アフターコロナの新しい時代の要請にしっかりと応えてゆく。

3. 2022年度事業計画

(1) オーケストラ・コンサート

◆“芸術性の追求”“社会性の拡充”

今年度も、東京定期・横浜定期・さいたま定期・相模原定期・府中どりーむコンサート・名曲コンサート・芸劇シリーズ・特別演奏会・第九特別演奏会等の様々の公演を通じて、芸術性と普及の両面で活動を展開してゆく。

首席指揮者インキネンは歴史と権威を誇るバイロイト音楽祭に2021年・2022年と登場し、まさに世界クラスの指揮者として日本フィルにドイツ音楽の本流を伝える。コロナ禍によって途絶えてしまった彼との「ベートーヴェン・チクルス」の完遂は必須の達成課題である。首席客演指揮者ウォンとは自身のライフワークであるマーラー作品と共に、日本そしてアジア地域の作品を積極的にとりあげてゆく。フレンド・オブ・JPO(芸術顧問)の広上淳一とは、昨年度より満を持してスタートしたブルックナーに今年も挑戦する。長年にわたり日本フィルと固い絆で結ばれた小林研一郎とは「生の感動」を拓ける活動を一層強く推し進め、また、我々の精神的支柱とも言える桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフとは徹底してロシア音楽の真髄を求める。2022年8月まで正指揮者を務める山田和樹とも、邦人作品を中心に、彼だけが成しえる唯一無二のプログラムに引き続き取り組んでゆく。山田とは任期終了後も、年1回の東京定期演奏会出演の他、新しいリレーションシップを求めてゆくことになる。

このように、巨匠と若手が揃ったこの盤石な指揮者体制のもと、一人一人のマエストロの個性を活かしたプログラムを展開する。

社会性の拡充という点では、日本フィルの個性である「温かさ」と充実した演奏を通して、より多くの方へ音楽の持つ力を伝える。そのために音楽の奥深い面白さを多くの方々に広げる工夫も充実させ、質の高い演奏で我が国音楽文化の水準向上に寄与し、音楽文化を広く内外に発信する。動画を通じた演奏会やインタビューの配信のみならず、過去の音源を活用した音源配信“Japan Philharmonic Orchestra Recordings”のように歴史あるオーケストラだからこそできる強みも活かしてゆきたい。

◆自治体との連携（オーケストラ・コンサート）

1994年より友好提携の覚書を結んでいる杉並区との関係は、近年より実り多いものになっており、拠点である杉並公会堂（PFI事業者・京王設備サービス）で定期的開催している「杉並公会堂シリーズ」、「夏休みコンサート」、「春休みオーケストラ探検（エデュケーション・フェスティバル）」は地域の音楽文化にとって重要な役割を担っている。また、埼玉県、相模原市とは強い信頼関係により定期的な演奏会を実施し、江戸川区（江戸川区総合文化センター）との関係強化も図る。また夏休みコンサートの開催にあたっては東京都及び近郊三県の自治体・教育委員会との長い信頼関係を維持し、協力を得ている。

◆他の芸術関連団体との連携（オーケストラ・コンサート）

47年の歴史を重ねている「夏休みコンサート」においてスターダンサーズ・バレエ団と長年にわたって協力関係を結んでおり、このコラボレーションによって生まれるバレエ上演は、「夏休みコンサート」における毎年2万人規模の観客動員にも大きく貢献している。コロナ禍の様々な制約の中でも、共演が可能な方法を模索していく。

また東京音楽大学との長年に渡る共働も忘れてはならない。2022年度には、6月の東京定期演奏会（ラザレフ指揮《アレコ》）や12月の第九（広上淳一指揮）で共演を予定している。オーケストラにとっては若く高い技術を誇る彼らとの共演は満足しうる芸術的成果を得ることが出来、一方大学としては学生にプロ団体とのコンサートを提供出来るまたとない機会であり、相互に大きなメリットがある。この良好な関係は今後も続けてゆきたい。

定期的に演奏会を開催しているサントリーホールや横浜みなとみらいホール、活動拠点である杉並公会堂とは強い信頼関係を維持し、特に直近は様々な感染症対策においても緊密な協力関係を保ち続ける。

(2) エデュケーション・プログラム、

リージョナル・アクティビティ（地域活動）

音楽愛好家だけを対象に限定せず、あらゆる層への取り組みを通じて地域全体を豊かにすることを目指している。

◆「エデュケーション・コンサート」

（オーケストラによるエデュケーション・プログラム）

本格的なオーケストラとバレエ、オーケストラの演奏に乗ってみんなで歌うコーナーで構成される「夏休みコンサート」は多くの子供が生の芸術に初めて触れる貴重な機会となっており、3世代にわたる2万人以上もの聴衆が集まる特別な意味のある公演である。2022年度は首都圏近郊及び京都で例年通りの公演開催を計画している。

毎年5月に京都市で開催している「小学生からのクラシック・コンサート」では音楽の面白さを全身で味わう体験型・対話型のプログラムを継続する。2年間にわたりコロナウイルスの影響で中止となっていたが、チャイコフスキーのバレエ音楽「くるみ割り人形」を体験型プログラムとして取り上げる。

0歳から入場可能な「春休みオーケストラ探検」は、過去2年にわたりコロナ禍で4才からに年齢を制限されてきたが、今年度は感染症の状況を見極めながら、本来の形である楽器体験等様々なイベントにより音楽のたのしさに子供たちが触れる機会を創出する。

◆室内楽プログラム（日本フィルの個性的な魅力発信）

室内楽を通じて演奏者とお客様が互いの体温を感じつつ音楽を共有することで、親密なコミュニケーションの場づくりを実現している。2022年度もこうした特性を活かして日本フィルの社会性豊かな活動を実行するとともに、楽団の個性あふれる魅力を発信していく。

自由で挑戦的な活動も室内楽編成ならではの魅力である。特に、他のジャンルとのコラボレーションでは日本フィルの魅力を新しいジャンルに届け、ファンを拡大する意義がある。11月のコネクテッド・インク出演では過去2年の実績を踏まえ、デジタルアートやダンスとのコラボレーションなどで新しい可能性を切り拓く。また日本人誰もが親しむラジオ体操を核にした室内楽コンサートも機会を捉えて実施していく。

さらに、楽員の個性が輝く室内楽シリーズの開始も検討していく。楽員の主体性と積極性が発揮される室内楽を通じた活動は日本フィルを特徴づける大切な事業であり、また楽員の高い技量、音楽性や個性を広く知ってもらうためにも室内楽は大きな意味を持つ。都内、横浜の優れた音響のホールで本格的な通年のシリーズを2023年度から計画しており、2022年度はその試金石として東京、横浜で各1公演を実施したい。

◆ワークショップ

音楽作りを通じて子どもたちの創造性を高めるワークショップ事業を、コミュニケーション・ディレクターのマイケル・スペンサーと共に継続しており、2022年度は西荻地域区民センターで子供向けの音楽ワークショップを実施するほか、女子美術大学でのワークショップ授業を行う。

◆杉並区での活動 地域とのコミュニケーション活動の広がりや深まり

友好提携関係にある杉並区とは、地域住民のための様々な活動を行っている。高齢者の社会参加の機会ともなっている75歳以上のための「敬老会」、成人式でも室内楽演奏を例年通り行う。友好提携に基づく公開リハーサルや区役所ロビーコンサート等を継続し、また杉並区からはふるさと納税を通じた被災地活動への支援を継続いただく。

杉並区からは2021年度に杉並区制90周年を記念した楽曲作成を委嘱され、福島弘和作曲「交響詩 鼓吹の桜」を完成させている。2022年度はこれを記念事業やオーケストラ公演で初演し、区内外で積極的に紹介する。また同曲は吹奏楽版も同時に作曲しており、この曲を通じて小中学校の吹奏楽との関わりも深めていく。

「60歳からの楽器教室」は高齢者の生きがいを作る楽器教室とコンサートである。昨年度より西荻地域区民センターとの共催とすることで経済的、運営面でも持続可能な体制が可能となった。2022年度も弦楽器のレッスンを行う。また同センターでは高齢者を対象とする平日昼間の室内学公演を実施。同事業は今後広域への展開を模索する。

◆その他の地域での取り組み

48年目を迎える九州公演。コロナ禍の中 2021年度は2年ぶりに9公演を実施（長崎のみホール臨時休館により中止）し、各地実行委員やお客様との関係を改めて深め、生の演奏を届ける重要性を実感する機会が実現できた。2022年度も各地の実行委員会との協働により全県9都市でオーケストラ・コンサートを、唐津市で小編成公演を開催予定。指揮は広上淳一が務める。室内楽で各地を訪問するプレコンサートなども恒例行事として再開する。

大牟田市、唐津市においては行政との連携も進めており、大牟田市では「音楽を通じた教育活動・地域活性化」に日本フィルが文化団体として参画する協力体制の調印を目指している。また唐津市では、市民会館のリニューアルオープン（2025年度予定）までの期間、室内楽等での教育・地域活動を行政と連携して行う計画である。

山口県宇部市では、宇部興産主催により市・教育委員会とともにオーケストラ・コンサートを開催。事前に学校や病院も訪問し、14年以上にわたり地域の文化向上に努めている。2022年度も引き続き10月に開催する。

室内楽編成では、こどもたちが音楽に身近に親しみ、関心と理解を高めるための小中学校への室内楽アウトリーチを、杉並区、埼玉県内で自治体との連携により実施する。

また、近年少子化の影響で活動が下火となっている小中学校のブラスバンド部を継続的に応援する目的で「日本フィルブラバンプロジェクト」を2023年度始動すべく計画したい。これに向け、2022年度は区内の中学生に指導を行う。

◆定期会員、お客様とのコミュニケーションと新規観客層の開拓

楽団の中核事業である演奏会の開催・出演によって財務基盤が盤石となるよう、コンサートの聴き手や楽団のファン・支援者の安定的増加につとめる。

コロナ禍により、楽団を取り巻くお客様、社会全体の環境変化が著しい。定期会員数や各種会員数が大幅に減少した現状を踏まえ、短期目標として定期会員の増加と新しい収益モデルの構築を掲げ、2022年度の重点目標として下記を掲げる。

- ①東京・横浜定期会員数回復（会員数：2022年度中に2800名に回復）
- ②シニア層・若年層双方への積極的アプローチによる新しいファン層開拓
- ③マーケティング・PR戦略の強化/楽団のカラー「温かさ」を活かした繋がり

◆企業・自治体等との連携によるコミュニケーションの創出と支援開拓

2022年度、企業主催の公演としてTHK 50周年記念コンサート（クローズドコンサート）、15回目となる宇部公演（宇部興産グループチャリティーコンサート）が予定されている。またローム株式会社の協賛により、2回目となる「コバケン・ワールド IN KYOTO」も実施予定である。

このような企業の支援が増える一方、これまでの企業との繋がりの方であった冠協賛や特別会員（法人寄付会員）はいずれも、コロナ禍によるコミュニケ

ーション機会の自粛により減少している。

2022 年度は企業の主催、協賛、特別会員の復活に努める。一方、「法人・自治体との連携」拡大により、社会性のある事業を拡大することも中長期目標である。企業・自治体・学校課題に正対した提案、(SDGs/ESG と音楽、企業の室内楽活用シーンの具体的提案、杉並区などでのエデュケーション・プログラムの他地域展開の可能性追求) 等、新たなコミュニケーションの形も創出していく。

◆新たな手法での支援創出：

2022年4月－5月には、社会性の拡充と社会的活動への支援獲得を目的とし、日経「未来ショッピング」にてクラウドファンディングを実施する。(目標金額：1,000 万円) これまでの支援者に留まらず、広く日本フィルの社会性を伝える手段として活用していく。

(3) 「被災地に音楽を」「東北の夢プロジェクト」

東日本大震災の発生から 12 年間継続している「被災地に音楽を」では、震災で大きな被害を受けた各地域のコミュニティが抱える課題や状況の変化に耳を傾けながら、長期的な取り組みを 300 回超にわたって実施している。過去 2 年はコロナ禍で積極的な訪問が難しかったが、2022 年度は岩手県山田町、宮城県石巻市、福島県南相馬市他を訪問する。

また、「被災地に音楽を」を基礎に 2019 年から開始している「東北の夢プロジェクト」では、被災地のニーズである「地域内外の交流」「芸術文化に触れる機会」「被災地からの発信」を実現すべく、東北地方で音楽や伝統芸能に励む子どもたちをゲストに迎え、共に「晴れ舞台」を作り上げることで、子どもたちの笑顔と未来を応援する。2022 年度はコロナ禍による中止を挟んで実質 3 年目を迎え、岩手県と福島県の学校から合唱団、伝統芸能、吹奏楽に励む子どもたち迎えて幅広い交流と文化発信のための場づくりを行う。また沿岸部各地で深刻化している高齢者の孤立の問題にも、高齢者をコンサート会場に招くバスツアーの実施などを通じて取り組んでいく。

(4) 演奏コンテンツの活用【新規項目】

映像、音源、配信を活用した新たな事業展開

オーケストラの経営に資する新たな収入源の確保は、コロナ禍を経験した今、益々その重要性が増してきている。そうした中で、映像、音源、配信に関する事業については新たなオンライン技術等の向上によりその可能性が広がっている。日本フィルは有料の映像配信、音源配信、ライブビューイングなどをこの間に実施してきており、これをさらに展開するとともに、豊富なコンテンツを活用した営業展開にも積極的に取り組んでいく。具体的には以下の事業を行う。

◆BS朝日『Welcome クラシック』（毎週水曜 22:54-23:00 レギュラー放送）
クラシック音楽をより親しみやすいものにするための情報や取り組みを紹介する日本フィル出演番組。ピエタリ・インキネン、山田和樹が登場している。

◆テレビマンユニオンによる映像コンテンツの新たな活用

- ① 収益化とモデル化の推進
- ② 映像を通じたオーケストラの魅力発信
- ③ ファンサービス（プレゼント企画等）の継続

◆JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA RECORDINGS

2020 年度文化庁「収益力強化事業」により楽団オリジナルレーベルを創設、2021 年度までに 52 タイトルの配信、2 タイトルの CD を商品開発した。

オリジナルレーベルでは、下記の 3 つを主軸方針としていく。

- ① 歴史的音源の発掘紹介（2021 年度重点課題として対応済み）
- ② 日本フィルの今の演奏水準を伝える実演
- ③ 日本人作曲家の作品

2022 年度は、配信により上記（2）（3）の新規商品化を促進していく。また、2021 年度までに商品化した歴史的音源（約 50 タイトル）の活用についても引き続き検討、推進していく。

2022 年度はこのほか、「夏休みコンサート」予習音源（CD/配信）も制作する。

◆コンテンツ活用についての諸権利の確保、維持

下記の基本方針をもとに、公益財団法人として適切にコンテンツを活用する。

- ① 実演の原盤権は楽団が所持し、二次使用を促進していく
- ② 実演家の権利を守り、隣接権は積極的に行使していく
- ③ 実演家との契約関係について、必要な見直しや契約の強化を進める

エキストラ演奏家とは、「出演依頼」から、電子契約システムによる「出演契約」化に取り組み始めており、2022 年度は出演契約化をさらに推進していく。

（5）社会の変化に対する音楽団体の関わり

◆テクノロジーを活用した社会的発信－「落合陽一×日本フィルプロジェクト」
（オーケストラ音楽をより多くの方に伝える新たな取り組み）

落合陽一氏と共に、テクノロジーの活用によってより多くの方へオーケストラ音楽を届ける新たな事業を、2018 年以來、毎年実施している。2022 年度も引き続きテクノロジーを活用した未来創造的の事業を継続、発信していく。

【事業計画別紙】オーケストラ・コンサート 主催公演各事業の計画

●東京定期演奏会(サントリーホール、金曜日/土曜日 2 回公演)

2020-21 年度を襲ったコロナ禍によって中止になった企画の「復活」が一つの軸である。感染症対策には十分配慮しつつ、合唱を伴う大規模作品の演奏にも再び挑戦、オーケストラの「日常」取り戻したい。またロマン派から現代に至るまで網羅するのが通例の日本フィルの東京定期らしく、今年度も幅広いレパートリーをラインナップした。ラザレフとのロシア、インキネンとのベートーヴェン、山田との邦人作品といった既定路線に加え、新首席客演指揮者カーチュン・ウォンとのマーラーや邦人作品特集など、常に芸術的前進を続ける日本フィルの姿をこの定期を通じて提示してゆく。

インキネン、ラザレフ、小林、山田、そして 2021 年 9 月からカーチュン・ウォン(首席客演指揮者)、広上淳一(フレンド・オブ・JPO)が新たに指揮者陣に加わった。近年稀にみる充実した体制を整えた日本フィルとしては、「伝統と革新」をテーマに据えてより一層の演奏水準向上と芸術性の追究を目指してゆく。一方でコロナ禍に由来する厳しい現実にも直面しなければならない。激減した定期会員の回復は必須の課題である。そのためには聴衆のニーズもある程度考慮に入れながら、そして収支のバランスをも考慮に入れながら企画・制作を行ってゆく必要がある。

数ある日本フィルの公演の中でも東京定期は最も芸術性を追い求めるよう位置づけられたシリーズである。時には難解と思われる作品もラインナップし、聴き手の知的好奇心を刺激してゆきたい。その一方では SNS や動画配信を通じて、リハーサル様子やアーティストへのインタビュー、企画担当者による解説などを聴衆に伝え、良い意味での親しみやすく敷居の低い定期演奏会の雰囲気醸成してゆきたい。また営業体制の強化により、これまでアプローチしていなかった客層の掘り起こしも積極的に行っていく。

	No.	出演	プログラム
4 月	739	指揮:小林研一郎	シューマン:交響曲第 4 番 ブラームス:交響曲第 4 番
5 月	740	指揮:カーチュン・ウォン ピアノ:務川慧悟 ソプラノ:三宅理恵	伊福部昭:ピアノとオーケストラのための《リトミカ・オスティナータ》 マーラー:交響曲第 4 番
6 月	741	指揮:アレクサンドル・ラザレフ ピアノ:小川典子 アレコ:ニコライ・エフレーモフ 若いジプシー:大槻孝志 ゼムフィーラ:大隅智佳子 老人:大塚博章 ジプシーの老女:山下牧子 合唱:東京音楽大学	ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第 1 番 ラフマニノフ:オペラ《アレコ》
7 月	742	指揮:広上淳一 ヴァイオリン:米元響子	ブルッフ:スコットランド幻想曲 ブルックナー:交響曲第 7 番
9 月	743	指揮:山田和樹	貴志康一:ヴァイオリン協奏曲

			ベルリオーズ:交響曲《イタリアのハロルド》
10月	744	指揮:ピエタリ・インキネン	ベートーヴェン:交響曲第8番 ベートーヴェン:交響曲第7番
11月	745	指揮:アレクサンドル・ラザレフ	バラギレフ(リャプノフ編曲):東洋風幻想曲《イスラメイ》 バラギレフ:交響詩《タマール》 バラギレフ:交響曲第1番
12月	746	指揮:下野竜也 ヴァイオリン:扇谷泰朋 テノール:糸賀修平	フィンジ:入祭唱 タネジ:3人の叫ぶ教皇 フィンジ:武器よさらば ヴォーン=ウィリアムズ:交響曲第6番
1月	747	指揮:カーチュン・ウォン	伊福部昭:シンフォニア・タブカーラ バルトーク:管弦楽のための協奏曲
3月	748	指揮:小林研一郎 ピアノ:金子三勇士	リスト:ピアノ協奏曲第1番 ベートーヴェン:交響曲第3番《英雄》

●横浜定期演奏会(横浜みなとみらいホール、各回土曜日)

これまでも「みなとみらい地区」というロケーションの良さと、土曜日夕方という時間を活かして好評を得てきた日本フィルの横浜定期演奏会。近年は横浜みなとみらいホールの長期改修やコロナ禍というイレギュラーな事態に巻き込まれ、以前のような展開が阻まれている。未だ厳しい状況ではあるが、インキネン、ラザレフ、小林研一郎、そして新たに加わったカーチュン・ウォン、広上淳一という盤石の指揮者陣を中心に、親しみやすくも深みのあるクラシック音楽の面白さを横浜の地で提供し、地域の音楽文化普及に引き続き努めることを意図して今回一連の公演を企画した。

ただし現在は、コロナ禍を契機に半減してしまった定期会員数の再構築が喫緊の課題である。2020-21年度は一切実施できなかった聴衆との交流イベント(シーズン・ファイナル・パーティ)などを通じて、再び舞台と客席の絆を取り戻してゆきたい。企画面では古典派から近現代までをフォローし、オーケストラの持つ幅広い世界観を紹介してゆく。そしてこういったコンテンツを通じて若い層からシニア世代に至るまでが、再び安心してホールに集い、音楽を存分に楽しめる環境を作り出すことを、年度を通じた大きな目標として掲げたい。

コロナによる各種規制が解除された暁には、50年近くの歴史を誇る横浜定期演奏会に相応しく、地元ならびに日本滞在外国人客の来場も積極的に促し文化的交流を図ってゆきたい。毎回開演前に舞台上で行われるプレトーク、そして7月と1月にそれぞれ行われる「シーズン・ファイナル・パーティ」等も復活させ、オーケストラの存在をより一層近いものとして感じて頂けるよう積極的に働きかけてゆく。

	No.	出演	プログラム
4月	376	指揮:ピエタリ・インキネン	シベリウス:交響詩《エン・サガ》 ベートーヴェン:交響曲第2番 ベートーヴェン:交響曲第4番

5月	377	【指揮者変更】 指揮:カーチュン・ウオン ヴァイオリン:南紫音	モーツァルト:《後宮からの逃走》序曲 シベリウス:ヴァイオリン協奏曲 ドヴォルザーク:交響曲第7番
6月	378	指揮:アレクサンドル・ラザレフ ヴァイオリン:ボリス・ベルキン	プロコフィエフ:ヴァイオリン協奏曲第2番 ショスタコーヴィチ:交響曲第5番
7月	379	指揮:広上淳一 ピアノ:福岡洗太郎	ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第4番 ベートーヴェン:交響曲第6番《田園》
9月	380	指揮:小林研一郎 ヴァイオリン:周防亮介	チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲 チャイコフスキー:交響曲第6番《悲愴》
10月	381	指揮:藤岡幸夫 ヴァイオリン:高木凜々子	ヴィヴァルディ:ヴァイオリン協奏曲集《四季》 ベートーヴェン:交響曲第7番
11月	382	指揮:アレクサンドル・ラザレフ 児童合唱:シンフォニーヒルズ少年少女 合唱団(予定)	チャイコフスキー:バレエ音楽《くるみ割り人形》全曲
12月	383	指揮:太田弦 ソプラノ:盛田麻央 / アルト:杉山由紀 テノール:与儀巧 / バス:黒田祐貴 合唱団:東京音楽大学(予定)	ベートーヴェン:劇音楽《エグモント》序曲 ベートーヴェン:交響曲第9番《合唱》
1月	384	指揮:カーチュン・ウオン ソリスト:調整中	ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番 ラフマニノフ:交響曲第2番
3月	385	指揮:藤岡幸夫 サクソフォン:須川展也	菅野祐悟:サクソフォン協奏曲《Mystic Forest》 チャイコフスキー:交響曲第4番

●夏休みコンサート

多くの子供たちが、夏休みに家族とともに身近なホールで音楽にふれ、その情操を高めていくことを願い続けてきた夏休みコンサートは、今年48年目を迎える。今回も子どもたちにオーケストラ音楽の楽しみを伝えてゆきたい。ただし、前年度同様、舞台上のオーケストラやバレエ・ダンサーにはコロナ対策が求められることを想定しており、プログラム選びには慎重を期している。

料金は通常のコンサートに比べ廉価で設定し、聴衆層の拡大、特に未来のクラシック音楽ファンの育成につとめる。2022年度も一都三県で16回と京都1回、計17回の主催公演、そして依頼公演としても1回出演する(加えて東北地域でも同内容に準じた公演2回開催予定)。

2022年はチャイコフスキーの《白鳥の湖》をメインにすえたバレエとの共演をはじめ、状況が許せば会場の聴衆とオーケストラが「共演」する“みんなで歌おう”のコーナーも実施したい。

指揮／永峰大輔

司会とうた／江原陽子 他

第2部の出演／上原彩子(ピアノ)、スターダンサーズ・バレエ団

●その他の演奏会(首都圏)

幅広い聴衆育成とクラシック音楽の普及を目指し、多彩な公演事業を行う。

中でも、桂冠名誉指揮者小林研一郎氏との「コバケン・ワールド」「第九特別演奏会」は、たいへん人気を博すシリーズとして定着しており、日本フィルの特徴ともいえる公演として認知されている。この2シリーズを軸に、「名曲コンサート」、「芸劇シリーズ」、「特別演奏会」等でさらなるクラシック音楽の普及に取り組む。また、いわゆる音楽中間層に対する様々な施策にも取り組んでいく。

●その他の演奏会(首都圏以外)

14回目となる宇部公演(宇部興産チャリティ・コンサート)が10月9日に予定されている。一昨年・昨年はコロナ禍の影響により参加者全員がPCR検査受診の上、現地での外出が禁止されるなど、イレギュラーな対応が求められた。今年度こそは通常のオーケストラ・コンサートを宇部の皆様にもお楽しみいただきたい。

また22年6月4日には、第2回目となる「コバケン・ワールド in KYOTO」が実施される(協賛:ローム株式会社、助成:ローム ミュージック ファンデーション)。

●九州公演

48年目を迎える九州公演は2023年2月11日より23日までの期間、九州全7県で10公演を行う。指揮はフレンド・オブ・JPO(芸術顧問)の広上淳一。

本ツアーは地元実行委員会同士の固い連携と熱い信念に基づく働きかけによって実現されている。50年目を迎えつつある今こそ、奏者・事務局は改めてその意義を見つめ直し、九州公演ならではの人と人との温かな交流を通じて感謝の意をあらわし、地域の文化振興に寄与してゆきたい。

●その他の主な主催演奏会

落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクトは、VOL.6公演を8月25日に開催。メディア芸術作品とオーケストラの融合を目指した新作委嘱(藤倉大)等を計画し、オーケストラの新たな可能性を追求する。クラウドファンディングによる資金調達(READYFOR)も実施予定。

杉並公会堂との共催で継続開催する「春休みオーケストラ探検」は、全館を利用し、2回のオーケストラ・コンサートの他、楽器体験やソロ・リレーコンサートなど多彩なプログラムをお楽しみいただいている。コロナ禍では接触を伴う各種イベントを実施できなかったが、2022年度は感染対策を講じ、状況が許せば大好評の関連イベントも実施し、子供たちが音楽に出会う機会を創出する。

●その他の主な共催事業

ホールとの連携による事業開催は、地元の杉並公会堂はもちろんのこと、サントリーホール、大宮ソニックシティ、府中の森芸術劇場、相模女子大学グリーンホールなどで引き続き積極的に継続していく。2022年度には江戸川区(江戸川区総合文化センター)での定期的な活動を視野に入れた公演もスタートする。聴衆のニーズを提供しつつ地域の文化振興を目指した新たなプログラムの提案に引き続き努めてゆく。